

博士論文の要旨

芸術研究科 芸術制作表現専攻 A18ZD01

申請者氏名 大橋裕子

絵画における時間の可視化 - 「シワ」を通して実現できること -

「シワ」とは時間が蓄積された痕跡であり美であると考え。時を経ることによって見えてきたその表象は美しく、そのものの歴史を象徴している。20年以上にわたる創作を通じて、自作に存在する多くの点、線、面、形、またそれらが集積された制作時に要した「手数」を繰り返し追体験するうちに、表現の目的は「シワ」そのものが持つ時間を描き出すことに加えて、それを描くために費やした時間自体ではないかと仮定した。

本論文では、作品中に見い出すことができる時間の要素と定義した「手数」や「制作に要する時間」を、「トレーシングペーパー」、「揉み紙」を使いながら分析し、表現の目的としての「時間の可視化」へと結論づけていく創作プロセスを論じる。

本論文は5章で構成される。

第1章 「自作品の考察-「シワ」と時間」では、「シワ」は時間が蓄積された痕跡であり美であると考えた。自作の表現方法の変遷を辿ったのち、今回の創作作品『見えてきたかたち』の画面から数カ所を抜き出し、その中から時間の要素を抽出し、「手数」と「制作に要する時間」を「時間の可視化」要素と定義した。

第2章 「芸術作品の中にみられる時間の可視化」では、絵画あるいは彫刻、インスタレーション、写真等の他分野の芸術作品において、どのようにそれぞれの時間が可視化されているか8作品を取り上げて考察した。その結果、扱う素材や表現方法は異なるものの、「手数」、「制作に要する時間」を「時間の可視化」へ繋げている作品が見られた。自作は「トレーシングペーパー」、「揉み紙」を支持体として「時間の可視化」を図る新しい試みであり、これらとは異なる方法であることがわかった。

第3章 「作品『記憶』における時間の可視化」では、縦220.0×横1,080.0cmの透過性のある「トレーシングペーパー」を支持体として使い、2枚を重ねることによって時間の層とした。第1層には墨と胡粉を使い合計11階調を表現し、第2層には鉛筆と木炭で描画するプロセスを示し、「手数」と「制作に要する時間」を検証した。そして2層を緩やかに重ねて展示することで、層の間に入り込んだ空気の揺らぎを変え、時間の見え方が流動的となり表象を変化させ、「時間の可視化」へと繋げた。全体図を図1に、部分を図2に示す。



図1 『記憶』の全体

(縦 220.0×横 1,080.0cm)



図2 『記憶』の部分

第4章 「作品『囁き1』『囁き2』『囁き3』における時間の可視化」では、「揉み紙」の「シワ」の痕跡、「揉み紙」と「トレーシングペーパー」の2層の重なり、2層の銀箔、ドローイングの形や筆の強弱、曲線の形状、線の長短、線の集積などを時間の集積として表現した。これらの「手数」を目で追うことによって、観者に「制作に要する時間」を追体験させ、「時間の可視化」を提示した。さらに、3枚の作品のうちの1枚については、「トレーシングペーパー」に穴を空けることで、他とは異なる時間経過の可視化を図った。3枚のパネルを並列させることによって、時間が少しずつ変化する繊細な表情や揺らぎを表現した。全体像を図3に示す。



図3 『囁き1』『囁き2』『囁き3』

30F (91.0×72.7cm)×3枚

第5章 「作品『見えてきたかたち』における時間の可視化」では、下地であるインプリマトゥーラ層にグレイズや油彩描画を重ね、画面に「シワ」を表現することで、痕跡として残された「手数」と「制作に要する時間」を浮かび上がらせた。透過してくる下層、幾重にも折り畳まれた大小の襞、皮膚、内臓、血管、生命の誕生が、色、線、形、層と有機的に絡み合うように画面作りをした。下層から浮き出たイメージを手がかりに描き始めた時には見られなかったが、完成時には筆跡、層の集積が一目で確認できるようになっていた。長い時間をかけて画面に表出したこの「手数」と「制作に要する時間」を「時間の可視化」と結論づけた。全体像を図4に示す。

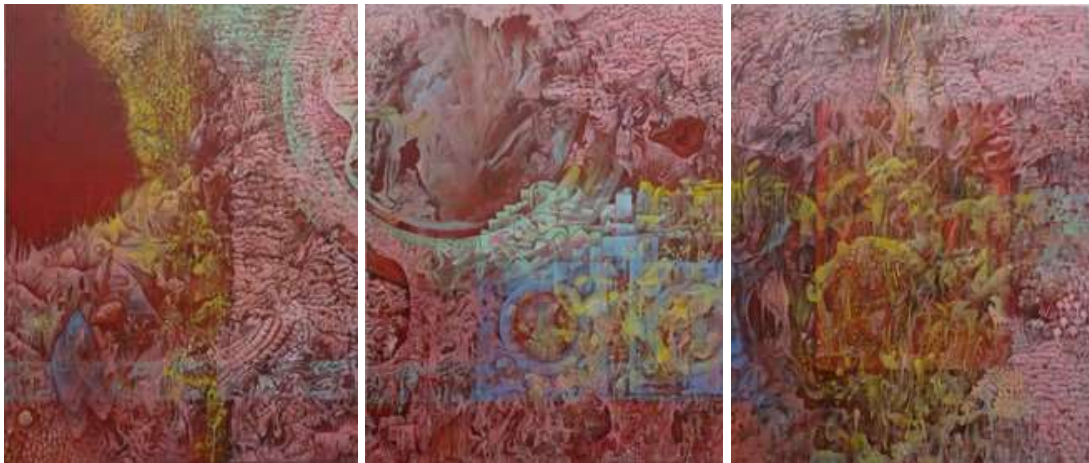


図4 『見えてきたかたち』

F100号(162.0×130.3cm)×3枚

終章では、「シワ」をテーマとした3作品の創作手法を通して、「シワ」そのものが持つ時間に加えて、「手数」や「制作に要した時間」を明示することで「時間の可視化」へと結論づけたことを総括した。これらの3作品を展示した展覧会の紹介や、今後の油彩画創作における方向性に言及した。

図1 編集：加藤淳子[岡山県天神山文化プラザ] 『TEMPLA SELECTION Vol.93 まだ見ぬものたち』 p.04-05 2020.

図2 同p.04

図3 筆者撮影

図4 筆者撮影